



# 産婦人科医の悲劇

---

もっともな殺意

---

春日信彦

---

## もったもな殺意

8月9日（木）、午後6時25分、横山夢子の両親、横山夫妻の遺体が自宅の寝室で発見された。睡眠薬による自殺と判明。遺書らしきものは無かったが、簡単なメモが残されていた。すべては私の責任です、と日記に記されていた。T大生の殺意を持った刺傷事件は世間の非難の的となっていたが、両親の自殺は世間の同情を誘った。

先月の7月7日（土）午後2時30分ごろ、T大キャンパス内で、T大法学部、横山夢子（20歳）はT大理学部教授、八神光三（51歳）を背後から長さ15センチのナイフで刺傷した。彼女はその場で取り押さえられ警察に引き渡された。この事件を目撃した数人の学生による供述と横山夢子の自白により彼女の殺人未遂は明白となり、東京地方裁判所に起訴状が提出された。

被害者のT大教授八神光三は原発推進派のリーダー格としてマスコミでも取り上げられており、全国各地での原発シンポジウムでたびたび発言をしていた。被告人は原発推進派への憎しみから殺意を抱き、刺傷行為にいたったと述べた。このことから、被告人の自白による殺意と第三者に目撃された刺傷行為は殺人未遂罪の証拠となった。

原発反対派の団体は彼女の行為を英雄扱いし、各地での原発反対運動においては彼女の行為を正当化する発言が頻繁に行われた。さらに、この事件は世界中の原発反対運動に拍車をかけた。彼女の刺傷行為は原発反対の社会現象の一つとしてマスコミは捉え、今後このような犯罪行為が世界中で起きるかのような報道までテレビ、新聞でなされた。

多くの人々はこの事件を原発反対派の事件として捉えたが、心理学者と小説家の中には「殺意」に感心を持ち、女子大生の殺意を題材に様々なフィクションが発表された。ある心理学者は、殺意は個人的な憎しみから生まれるものであり、社会的正義心からは生まれるものではないとの仮説から、彼女の殺意は原発への憎しみからではなく、何らかの被害者への個人的憎しみから生じたものではないかとの意見を述べた。

### 殺意に隠された謎

刺傷事件後、仕事に身が入らないコロнда君は今日も書斎でぼんやりと夢子のことを考えていた。当然、夢子の「殺意」についてである。いつものようにお菊さんがお茶を運んでやってきた。部屋に入ってきたお菊さんは椅子に腰かけると夢子事件の話始めた。「今の若い子はカッとなると何をしでかすか、恐ろしいったらありやしない、夢子は歴史に残る英雄にでもなりたかったのかしら？」独り言のように窓に向かってつぶやいた。

コロンダ君は夢子のことを考えるたびに胃がムカムカして、お茶を飲む気も起きなかった。「お菊さん、夢子の殺意についてどう思う？」夢子の殺意は原発と関係があるのかコロンダ君は疑問に思っていた。「本人が言うように原発が憎かったんじゃないですか、だから、カツとなって、ぶすりとやったんでしょう」お菊も夢子の自白を真に受けている。「ところが、そうとも言えないようなんだよ。事件があつて、3日後にいとこの笙ちゃんから電話があつてね、まったく信じられないって言っているんだよ」コロンダ君は笙子の話を聞いてから夢子への謎が深まった。

「笙ちゃんの電話って？聞かせてくださいな、もったいぶらずに」詮索好きのお菊の好奇心が頭をもたげた。「いやね、笙ちゃんは夢子と高校時代の同級生で彼女のことをよく知っているんだ。笙ちゃんはギター、夢子はバイオリンをやっていて、二人で一緒に練習もやっていたそうだよ。夢子は音楽の話はよくしたが、社会問題、特に原発について、一度も口にしたことは無かったそうだよ。もし、原発に反感を持っていたなら、笙ちゃんの見解を聞いていたんじゃないかと、思うんだが」笙子から聞いた話のポイントを厚化粧のお菊の顔を見つめて話した。

「へ～、なんだか、変な話ですね、夢子は法学部でしたね、だったら、原発に関心があったはずじゃないですか？女はファッション、芸能人、グルメ、クラスメートの悪口とか、くだらない話はよくだべるけど、社会問題について友達とは話さないものですよ、坊ちゃん」お菊は女性にめっぽう弱いコロнда君にガールズトークを教えた。

「なるほど、そうですか。それと、高2の秋頃から夢子は猛烈に受験勉強をするようになったそうだよ。どうしても、T大に行かなければならないと言って、バイオリンの練習も一緒にしなくなったそうなんだ。今まで、バイオリニストになる夢を話していた夢子が、急にT大合格に夢を変更したんだ。行かなければならないって、どういうことだろう？」コロнда君はさらなる疑問をお菊にぶつけた。

「ご両親に発破をかけられたんじゃないですか？坊ちゃん、こちらにお越しくささいな。お茶が冷えますよ」お菊はお茶に眼をやった。「ところがね、笙ちゃんは夢子のご両親とも何度か話をしたことがあって、夢子には音楽の道に進んでほしい、とご両親は言っておられたさうだよ。むしろ、ヨーロッパの音楽大学に留学してほしいようなことを言っておられたさうだよ」コロンダ君はテーブルに着くと一切れのようかんを口に押し込んだ。

「それは、奇妙ですね、若い子の考えることは年寄りにはわかりませんよ。本人が言っていることが正しいんだから、坊ちゃんが悩むような事件じゃありませんよ」お菊もようかんを口に押し込んだ。「ここだけの話だけど、いつもの新聞記者から情報を買ったんだけどね、20年前に、ご両親は台東区から福岡の中央区に移っているんだ。つまり、20年前、台東区で産婦人科医院を開業していたということだよ。なんと、八神教授も当時台東区に住んでいたんだよ。

特に、これは極秘だよ、八神夫人は30歳のとき子宮ガンで子宮を摘出したらしいんだ。ところがだよ、現在、夫人は53歳だから、夢子の年齢から逆算すると、33歳の時に夢子を産んだことになる。驚くことに、夫人は子宮が無いのに子供を産んだことになる。まあ、こんなことは無いから、夢子は養子と言うことだよ。このことは警察も知らないと思うよ」コロンダ君はドヤ顔になってきた。

「養子と刺傷事件とは関係ないと思いますけどね？」大きな眼をギョロツとさせてお茶を流し込んだ。「八神教授のことだけどね、19年前に夫人をなくしておられるんだ。それも、自殺と言うことらしい。自殺した横山夫妻、養子の夢子、19年前に自殺した八神夫人、被害者の八神光三、なんだか、頭が痛くなってきたよ」コロンダ君は横山家、夢子、八神家に何か隠された秘密があるようにぼんやりと思えた。



「坊ちゃんは夢子の秘密に興味がおありみたいですが、殺意は本人が自白したわけでしょ、どうにもならないんじゃないですか？普通だったら、殺意があっても、自分から殺意があったとは言わないものですよ。カツとなって刺しました、とか、殺す気はありませんでした、とか、私だったら言いますけどね。学業は秀才であっても、かなり、お馬鹿な女ってことですよ」お菊はあきれた顔でコロダ君を見つめた。「そうだよ！その通りなんだ、なぜ、秀才の彼女がそんな馬鹿なことを自白したかだよ。なんだか、夢子のことを考えると眠れないんだよ」コロダ君は沈んだ眼でお茶をすすった。

「坊ちゃんは、夢子みたいな、感情で行動するような今風な女性がお好きなんですか？できれば、着物が似合う古風で家柄のいいお嬢さんを早くお探しいただきたいものですわ。お菊の眼にかなう素敵な彼女はいないんですか？」お菊は話を替えた。「お菊さんは何かというと、彼女の話を持ち出すんだから。僕は女性にはもてないんだよ。当分、結婚は無理だよ。お袋にそう言っといてくれよ」コロダ君は立ち上がると机の椅子に腰掛けた。

「ところで、夢子の本当の両親は誰でしょうね？」お菊は話を戻しコロンダ君の機嫌をとった。「それは、わからないんだな。横山夫妻のみぞ知る、ということだよ。だけど、今となつては・・・もしかしたら、この秘密を永遠に謎とするために自殺したのかもしれないね、お菊さん、どう思う？」眼を輝かせたコロンダ君はテーブルに戻った。

「それは言えますね、養子が関係ないどころか、本当の両親がわかれば、殺意が解明するんじゃないですか？」お菊さんも眼が輝いてきた。「だけど、これだけはどうすることもできないんだよ。私立探偵に頼んでも無理だろうな。19年前に自殺した八神夫人と何か関係があるんだろうか？」コロンダ君は自殺という言葉が気にかかっていた。

「こういうのはどうです、坊ちゃん、ふとしたきっかけから、元彼と八神夫人は不倫をした。夫人は妊娠しないように細心の注意を払って密会したが、突然の生理不順で妊娠してしまった。夫人はお腹の子を墮胎しようかと思ったが、それができなかった。夫には悪いとは思ったが、そ知らぬ顔して横山産婦人科で出産した。その子が夢子。ところが、八神夫妻は共にB型、生まれてきた子はA型だった。問い詰められた夫人は不倫を自白した。

結局、不倫の子である夢子を手放さなくてはならなくなった。このとき、八神夫人は密かに横山先生に相談したところ、子供がいなかった横山夫妻は夢子を養子にほしいと申し出た。夢子を養子にした横山夫妻は夢子を実の子供として出生届を出すために、すぐに福岡に引っ越した。夢子を涙して手放した夫人であったが、自分の罪に気がおかしくなって1年後自殺した」お菊は大きな眼でドヤ顔になった。

「なるほど、いい妄想だね。八神教授は実の母親を自殺に追いやった男ということになるから考えられなくもないけれど、自殺の原因を作ったのは不倫をした実の母親だからね。憎しみを抱く相手が違うんじゃないかな。実の母親は離婚してでも、もしできなかつたとしても、夢子を連れて家を飛び出し、一人で育てるべきだったんじゃないかな。むしろ、不倫相手の実の父親のほうが無責任じゃないだろうか。殺意を抱くんだったら、不倫相手の実の父親だろう。それこそ、八神教授は逆恨みされた惨めな被害者ということになる。

それと、横山夫妻の自殺とはどんな関係があるんだい。夢子が刺傷事件を犯したからといって自殺して責任を取らなければならないのだろうか？ そうだ、夢子は自分が不倫の子ということはどうやって知ったんだい。僕は知りえないと思うんだが」コロンダ君は夢子の殺意にはもっと深刻な理由があるような気がした。

「そういわれてみると、たとえ偶然、養子とわかって不倫の子とまではわかりませんよね。しかも、自殺した八神夫人が実の母親だとは」お菊さんは自分の妄想に自信があったが、無理があることに気づいた。コロнда君には夢子の自白にどうしても納得いかないものがあった。誰でも衝動的に暴力行為に走る可能性はあるが、殺意を抱き、それを行動に移すということは、個人的に、とても根深い憎しみがなければ起こりえないのではないかと思った。

「僕は夢子の自白が嘘のように思えるんだよ。お菊さん、笙ちゃんからもっと具体的な話を聞いて、何か手がかりを掴んでくれないだろうか？女性同士だとガールズトークができて、話が弾むと思うんだが。おいしいものを食べさせると、きっといろんなことを思い出してくれると思うよ。福岡観光の旅費はたんまりあげるから、どうだろう？お菊さん」コロнда君は最も夢子のことを知っている笙子が何か手がかりを握っているように思えて、お菊さんに情報収集を依頼した。

「まあ、夢子に彼氏がいたかどうかだとか、男では聞きにくい話も聞けますしね。観光旅行とあれば行かなくもないですが、たんまりお小遣いいただけるんでしょうね。久しぶりに笙ちゃんに会えることだし、お願いを聞いてあげますかね」お菊は観光旅行にいけるとあって心では嬉しくてたまらなかったが、あえて、恩を着せるようにもったいぶった返事をした。

「ありがとう、恩に着るよ、いくらでもあげるから、しっかり情報を取ってきてくださいね。すぐにでも、暇を取って、福岡に飛んでください」コロンダ君はきっと新しい手がかりがつかめる予感がした。メールでお菊さんは笙子と日程を打ち合わせると飛行機で福岡に飛んだ。午前10時に到着したお菊さんはタクシーでキャナルシティーに向かった。そこで笙子と落ち合うと、黄色のスイフトスポーツに乗った二人は、202号線バイパスで糸島へと突っ走った。

「笙ちゃん、迎えに来てくれてありがとう。早速、おいしいものでも頂きましょう。お小遣いはたんまりあるから遠慮はいらないわよ。糸島は何がおいしい？そう、お蕎麦がおいしいところはある？笙ちゃんも、お蕎麦、大好きだったわね」早速、お菊は笙子の機嫌をとる作戦に出た。笙子は蕎麦と聞いて笑顔を隠しきれなかった。

「お蕎麦だったら、あそこね。高祖においしいところがあるの。江戸流手打ちだから、きっと気に入ると思うわ」笙子は時々食べに行く蕎麦屋に向かった。「へ～、江戸流ね、それは楽しみだわ、ど田舎にもそんなお店があるのね」お菊は糸島には古墳しかないと思っている。「糸島はど田舎でも空気は良くて、観光名所はたくさんあるんだから。きっと、糸島を気に入ると思うわ」ど田舎と言われて少しムカついたが、確かにど田舎だから笑顔で案内することにした。

「糸島に引っ越したのはいつからだったかしら、以前は赤坂だったでしょ。この前来たときは、笙ちゃんはまだ中学生だったわね。そう、大濠公園の桜がとてもきれいだったわね」お菊は電話では何度か笙子と話したことはあったが、直に会うのは6年ぶりであった。キャナルの入口で待っていた笙子を見ても最初は笙子とは気づかなかった。お菊さん、と笙子が声をかけたとき、あどけなかつたころの笙子の面影がパツと眼に浮かんだ。

「二年前に引っ越したの。父が長生きするには糸島が一番と言って、私が大学に入学すると早速前原に新築したのよ。父って、思い立ったら吉日って言って、すぐに実行する人だから、家族みんなびっくりしちゃった。だけど、父が言っていたことは正しかったわ。糸島はとってもいいところよ。糸島をじっくり観光してくださいね、お菊さん」最初、笙子はど田舎の糸島を嫌っていたが、住んでみると空気がきれいで交通の便もいいことがわかり、今では友達を案内して自慢するようになっていた。



「福岡は田舎の匂いがするけど、糸島はどんな匂いがするのかしらね。古墳の匂いかしら？　そういえば、周りにはビルが一つもないわね。幽霊が出るんじゃないかしら。こんなところにも人類が住めるのね。やはり、長生きするものね」お菊は東京育ちで田舎のよさがまったくわかっていない。さすがに笙子もここまで馬鹿にされるとキレた。

「そんなに田舎がいやだったら天神でお食事しましょうか？」笙子は目を吊り上げて睨みつけた。「え、何か気に障ること言ったかしら。田舎って空気がおいしくて、景色も素敵じゃない。笙子さん、糸島、とっても気に入ったわ」お菊はつい本音を言ってしまい、まずかったと気づいた。せっかく、情報を取るために田舎までやってきたのに、笙子の機嫌を損ねては肝心の話ができなくなってしまうと、即座に田舎をほめた。

「お菊さんも、田舎のよさがすぐにわかりますよ。最初は誰だってびっくりするんです。だけど、いろんな名所を観光されると、きっと感動していただけると思います。蕎麦屋、もう少しでつきますよ」機嫌を取り直した笙子は少しムカついたことに恥ずかしくなった。笙子も最初は田舎を軽蔑していたからだ。末永を左に曲がると古びた蕎麦屋が左手に見えた。

二人は席に案内されると、左上にお花、手前にお箸、中央に二皿の突出しが乗せられたお盆が運ばれてきた。お菊は聞き出す項目をイメージして早速話を切り出した。「笙ちゃんは坊ちゃんに夢子さんのことをお話されたでしょ。私も坊ちゃんにそのお話を聞いて頷いたのよ。夢子さんの自白は何かの間違いよね」お菊は笙子の言っていたことを肯定し、笙子の口を軽くする作戦に出た。

「あら、やっぱりその件でやってきたのね。さっしはついていたけど、秀ちゃんに頼まれたのね。夢子のことは私が一番わかっているつもりよ。あんな自白、まったくの嘘よ。信じられないわ」笙子はメニューをめくりながら小さな声で答えた。笙子は自分の注文を決めるとお菊の注文を確認した。お菊は三味蕎麦に眼をすえると指で笙子に合図した。笙子も同じ三味蕎麦を注文した。

「夢子さんはバイオリンがお得意でいらしたとお聞きしたわ。将来はバイオリニストを夢見ていらしたとか。ところが、突然、2年のころからT大を目指して勉強なされたみたいね。いったい、何があったのかしらね」お菊は夢子の夢に変化があったことに何か糸口があるのではないかと思った。

「そうなのよ、中学のころから一緒に練習してきた中で、二人とも音楽の道を目指していたのよ。特別養護老人ホームや児童養護施設などでライブをやったりもしたのよ。それなのに、突然練習はしなくなるし、T大に合格しなければならないのって、まったくわけのわからないことを言い出し、頭がおかしくなったんじゃないかと思ったわ。夢子のご両親は二人一緒にヨーロッパの音大に留学しなさい、と言っていたほどなのに」笙子は小さな声で早口にしゃべった。

お菊は夢子の自白は嘘だと確信した。夢子には原発とは関係ない、八神教授との間に隠された事件があると思った。お菊は異性関係のもつれが原因ではないかとふと思った。「夢子さんが帰省されたときは、お会いになっていたでしょ。そんな時、彼氏との悩みなんか話されなかったかしら？」お菊は周りには聞こえないように極力小さな声で訊ねた。それぞれに、お盆に載った三つのお椀の蕎麦が運ばれてくると、笙子はとろろ蕎麦のお椀を、お菊は海老天蕎麦のお椀をそれぞれ手に取った。

「夢子は男嫌いなの。と言うより、左足が義足でしょ。だから、あまり男性とはつき合いたくなかったみたいね。他の人には話さないでね、夢子は奇形児だったの。耳、鼻、唇、左脚の膝から下がなかったの。今は、普通に見えるけど、耳と鼻は人工なの。唇は整形して、左足は義足ね。だから、小さいころはいじめにあってとてもつらかったと思う。だけど、気が強くて、頭も良くて、バイオリンもすごく才能があるのよ。ご両親は夢子のためだったら、何でもしてあげたいとおっしゃられていたわ」笙子は奇形児という言葉を特に小さな声で話した。

奇形児という言葉をお菊は次のことばに詰まった。夢子は奇形児の養子であった。いったいなぜ、横山夫妻は奇形児を養子にしたのか？奇形児の実の両親は誰なのか？この疑問がお菊の頭を駆け巡った。「夢子さんは原発と何か関係があるのかしら？憎んでいらしたみたいだけど」お菊は原発の事に触れた。

「わかりません。夢子は社会問題には一切関心がなくて、原発のことも一度も口にすることはなかったわ。夢子は音楽の話しかしない子だったから、夢子の口から原発の言葉が出たときは嘔然としました」笙子も夢子の本当の気持ちが知りたかった。夢子には八神教授に殺意を抱くほどの憎しみが、確かにあったに違いない。しかし、衝動的な行動にしろ、刺傷事件を犯した夢子の罪は決して消えることはない。笙子は親友として何もしてあげられなかったことが悲しかった。

笙子の暗くなった顔を見ると、お菊はこれ以上質問できなくなった。食事を終えると雷山観音に行くことにした。二人は手を合わせると夢子の幸せを願った。二人は夢子が改心し元気になってもどって来ることを願った。きっと、人には言えないつらい事情が夢子にはあったに違いないと、二人は夢子を心からいたわった。そして、夢子を救ってくださるように神様にお願いした

。

## 20年前の記録

夢子の殺人未遂罪の有罪判決が言い渡された翌日、夢子から笙子にメールが届いた。「笙子ごめんなさい。今まで親友でいてくれてありがとう。世界中で信用できたのは笙子一人でした。笙子にはどんなことでも話してきました。だけど、一つだけ隠していたことがあります。八神教授への殺意の理由です。その理由を笙子だけに言います。

高2の8月の第二月曜日、燃えるごみを出す日の前日でした。いつもは母がやっているのですが、その日は私が父の書斎のゴミ箱のごみを集めました。その中に少し膨らんだ黄色い封筒が捨ててありました。最初はゴミ袋に捨てましたが、なぜかチョッとだけ中を見てしまいました。そこには3枚のフロッピーが入っていました。父が処分しようとしたフロッピーだから、昔の研究論文の下書きだと思いましたが、興味本位で取り出してしまいました。

二枚のフロッピーのラベルには思った通り論文と書いてありましたが、残りの一枚のそれには記録と書いてありました。記録という言葉を読んだ瞬間、そのフロッピーを隠すようにポケットに押し込んでいました。ゴミ袋を勝手口に持って行った後、ポケットのフロッピーを取り出し、しばらく考えました。父が処分したものでも、貴重な記録が残されていることは予想されました。

黙って見ては父に悪いと思いましたが、気持ちを抑えきれず見てしまいました。内容はいろんな出産の記録でした。父の仕事がいかに重要で大切な仕事であるかを改めてわかりました。しばらく読んだあと、このフロッピーも捨てようと思いつつ目を通しながら、最後のほうにロールさせていたそのとき、「奇形児」の言葉が眼に飛び込んできました。はっとして、手を止め時はすでに「未発表の奇形児」と題された文章を読んでいた。下記はその一部の抜粋です。



胎児は奇形児です。耳と鼻とがありません。唇は未発達で接合した状態です。さらに、左足の膝から下がありません。生まれてすぐに死亡する可能性があります。しかし、もし、すぐに閉じられた唇をメスで開くことができれば、産声を上げ呼吸ができるはずです。危険な奇形児ではありますが、私にお任せください。八神さん」

「先生、奇形児を育てることはできません。私は原発推進の研究者です。奇形児の情報が漏れたなら、原発反対派の格好の反撃材料になってしまいます。できれば、死産と言うことで処分していただきたいのですが。お願いします」

「それはできません。唇を開けば呼吸できる可能性があるのです。生存する可能性が1パーセントでもあれば、命を救う義務が医者にはあるのです。奇形児でも立派な人間なのです。私も全力を尽くします。一緒に育てましょう。勇気を出してください、八神さん」

「T大の御用学者にはできないのです。奇形児のために将来を失ってしまう。私にはできない。死産にしてください。いくら払えばいいのですか！先生」

笙子はもうわかったでしょう。結局、横山先生が私の命を救ってくれたのです。八神教授、実の父は私を見殺しにしようとしたのです。実の父は、私に対し殺意を抱いたのです。だから、私も・・・

私は20歳まで生きてこられたことに感謝しています。そして、私を理解してくれたただ一人の親友、笙子を決して忘れません。さようなら。

## 産婦人科医の悲劇

<http://p.booklog.jp/book/51370>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/51370>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/51370>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ